

# CLIFF EDGE PROJECT

Art project at Izu peninsula

うぶすなの水文学



大塚 惇平

Jumpei Ohtsuka

1983年静岡県生まれ。早稲田大学第一文学部、東京藝術大学音楽学部邦楽科雅楽専攻卒業。古典音楽はもとより、現代音楽や即興演奏、多様なジャンルのアーティストとの表現活動を積極的に行う。宮本卯之助商店による「いやさかプロジェクト」、ヴァイオリニスト川井郁子の「オーケストラ響」などに参加の他、NHK大河ドラマなどにも出演。2018年には「SILKROAD JAPAN」を有志と共に立ち上げ、共同代表として日本と世界の伝統芸能の交流と発展に寄与するべく活動している。

中村 香奈子

Kanako Nakamura

「香風舎雅楽乃会」主宰、「花舞鳥歌風遊月響雅楽団」「雅楽三味中村さんち」を仲間と共同主宰。東京藝術大学にて芝祐靖氏に横笛をはじめ雅楽全般、のち、豊英秋氏に古代歌謡、右舞、箏等を師事。雅楽のたのしみや正倉院復元楽器排簫の音色を伝える活動を中心とし、源へ心を澄ます「かむながらの笛（即興演奏）」では木の実の笛や響笛も奏でる。形（空間）に息を吹き込むことをライフワークとしている。

三浦 元則

Motonori Miura

1982年広島県生まれ。東京藝術大学音楽学部邦楽科雅楽専攻卒業。同大学非常勤講師(2015-2022年)。幼少より雅楽に親しみ、父・三浦進に卒業の手ほどきを受ける。卒業後、古代歌謡を東儀雅孝、右舞を多志輝、各氏に師事。古典の演奏はもとより、現代音楽の初演、レコーディング、メディア出演、舞台作品の音楽監修など活動は多岐に渡る。「アンサンブル室町」、川井郁子の「オーケストラ響」、Tim Heckerの「ワールドツアー」など国内外の音楽プロジェクトにも多数参加。「東京楽所」「日本音楽集団」所属。

永治 晃子

Akiko Nagaya

1978年岐阜県生まれ。2004年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻修士課程修了。時の移ろいをテーマに水をモチーフとした映像、インスタレーション、立体作品を制作している。近年の主な展覧会に「ハヤシノオクニ」(2023、壺中天の本と珈琲、静岡)、「水の「音」から生まれるかたち展」(2021、三島市民文化会館B1ギャラリー、静岡)、「ゆうれいたちのソウマトウ- Phantom / Phantasmagoria」(2021、東京藝術大学大学院美術研究科陳列館、東京)がある。「卒業制作買上」(2002、東京藝術大学)、「大橋賞」(2002、東京藝術大学)受賞。

西野 壮平

Sohei Nishino

1982年兵庫県生まれ。2004年大阪芸術大学写真学科卒業。歩くこと、旅を通して得た体験や記憶をもとに制作を続けている。近年の主な展覧会に「西野壮平 写真展 Walk With Me」(2023、金津創作の森美術館 アートコア、福井)、「潜在景色 - Latent Scenery -」(2022、アーツ前橋、群馬)、「緑をなぞる "tracing lines"」(2022、キャンピングラリー、東京)、「New Work: Sohei Nishino Exhibition」(2016、サンフランシスコ近代美術館、サンフランシスコ)がある。

展覧会概要

会期 | 2023年10月14日(土)～11月11日(土) 29日間・会期中無休 9:30～16:00  
(第4会場で日没後に作品上映があります。公開日時はHPにて発信いたします。)

入場料 | 無料

会場 |

- 第1会場 貴僧坊公民館(伊豆市貴僧坊109-1)
- 第2会場 貴僧坊水神社(伊豆市貴僧坊140-1)
- 第3会場 民宿カプリコーン(伊豆市貴僧坊81-1)
- 第4会場 平成森鮮組屯所(伊豆市貴僧坊38-1)
- 第5会場 井上倉庫(伊豆市姫之湯469-1)

主催 | Cliff Edge Project

支援 | アーツカウンシルしずおか

助成 | 財団法人 花王芸術・科学財団 公益財団法人 野村財団 公益財団法人 福武財団 公益財団法人 三菱UFJ信託地域文化財団

後援 | 伊豆市教育委員会、一般社団法人美しい伊豆創造センター、FM IS みらいステーション

静岡新聞社・静岡放送、静岡大学未来社会デザイン機構

協力 | 伊豆市貴僧坊地区、一般社団法人平成森鮮組、

キャンノンマーケティングジャパン株式会社、白版印刷株式会社

企画・運営:住康平、伊藤啓太、松本圭司、山下隆 アーカイブ:細道航 広報:白井ゆり オブザーバー:吉田雄大 デザイン:BARCO  
WEBコーディング:住麻紀 サインデザイン:清水玲 展示照明:舞台照明:伊藤啓太 撮影:磯村拓也、都築透、中川寛之

## Artist Profile アーティストプロフィール

荒木 佑介

Yusuke Araki

1979年リビア生まれ。2003年東京工業大学芸術学部写真学科卒業。歴史、宗教、民俗等、リサーチを元に作品を制作している。2016、2019年「瀬戸内国際芸術祭」に参加。2020年からEBUNEに参加。「グロンα」に引揚船、60年代初頭の沖縄に関する記事を寄稿。月刊美術批評WEBマガジン「レビューとレポート」にリサーチ結果をまとめた「調査報告書」(伊藤允彦氏との共著)を寄稿している。

伊藤 允彦

Masahiko Ito

1987年静岡県生まれ。2011年静岡大学大学院農学研究科修了。災害と慰霊をテーマに、各地の地形や伝承を記録、解析し地図や物体を制作している。リサーチとして、月刊美術批評WEBマガジン「レビューとレポート」にリサーチ結果をまとめた「調査報告書」を荒木佑介氏との共著で断続的に寄稿。作品制作として、2020年からEBUNEに継続的に参加。EBUNEでの主要な作品として、「EBUNE 波路島漂着」(2021、津井の家「琴屋」、兵庫)における儀式制作・実行がある。

BACCO

BACCO Rieko & Tatsuya Matsushita

2005年より静岡県田方郡在住。2007年1月に株式会社BACCO設立。落ち着きがなく、いつも何か面白いことを探しているねずみ年の松下理恵子(デザイン担当)と、生き物が好きだけど人間のことはよくわからないうさぎ年の松下達矢(イラスト担当)からなるデザインユニット。販促物、書籍、商品のパッケージのデザインや自社ブランド製品の制作などジャンルレスに活動中。

漆原 夏樹

Natsuki Urushihara

1977年神奈川県生まれ。2003年東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画研究分野修了。日本絵画における写生という手法を手掛かりに、存在の痕跡としての絵画をテーマに制作している。近年の主な展覧会に「描きふる絵 変貌する日本画のイメージ」(2023、北海道立近代美術館、札幌)、「漆原夏樹展—パライア・パレイドリア—」(2022、ギャラリー広田美術、東京)、「うつろいの住処—それぞれの地平—」(2020、豊門会館旧田家住宅、静岡)、「NIHON画—新たな地平を求めて—」(2016、豊橋市美術館、愛知)がある。「第6回トリエンナーレ豊橋星野真吾賞展明日の日本画を求めて」(2014)大賞受賞。

千賀 基央

Motonaka Senga

1984年神奈川県生まれ。2008年立命館大学大学院理工学研究科創造理工学専攻修了。2019年千賀製作所株式会社設立。近年の主な活動として「齋藤」精進料理(2023年、箱根町)、「ナラクヤフ」足湯+サウナ(2022年、箱根町)、「杉崎運輸」トランスポーター改装(2022年、小田原市)、「ながや」蕎麦割烹(2021年、小田原市)、「パサディナハイツ」住戸改修(2020年、函南町)、雑誌「LIVES」VOL.120表紙、テレビ東京「隣のソゴイ家」などがある。

大久保 美貴

Miki Ohkubo

1988年新潟県生まれ。2019年東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻(保存科学)博士後期課程修了。陶磁器釉薬の発色機構の研究を専門とする。三度の妊娠を経験し、一人目から順に正期産、流産、早産で出産。以後は「人の心身の健康」をテーマにアーティスト活動に取り組む。その手法は陶芸やテキスト、映像など。近年の主な展覧会に「私の流産と早産」(2022、壺中天の本と珈琲、静岡)、「東京藝術大学卒業・修了作品展」(2019、東京藝術大学美術館、東京)、「未来へつなぐ展」(2015、上野の森美術館、東京)がある。

小暮 香帆

Kaho Kogure

ダンサー・振付家。自身の作品を発表しながら様々な領域で動きの美学を展開。笠井霞など多数振付家作品に出演、海外ツアーにも参加。近年は他ジャンルのアーティストとのコラボレーション、映画・映像作品への振付、パリ・コレクション出演など活動の幅を広げている。主なソロ作品に「Dear」(2023)、「ミモザ」(2015)など。DaBYレジダンスアーティスト。めぐりめぐるものを大切にして踊っている。https://kogurekaho.com

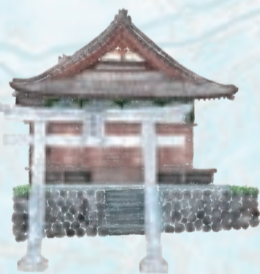
① 第1会場 貴僧坊公民館



「巡り」 大久保美貴  
陶・テキスト・映像

水の神ミヅノハメは、イザナミが火の神カグツチを産む際に産産火を傷し、苦しみで失禁したその尿から生まれている。「母子ともに健康」は当たり前ではない。イザナミのように母が命を落とすこともあれば、子が流れることもある。人知れず流れてしまった子は、果たしてどこへ行くのだろう。カワゴ平火山からくる貴僧坊の石と土、そして湧き出す水は、イザナミの死と、山、川、海、空とともに巡りつづける、子の命を想起させる。

② 第2会場 貴僧坊水神社



「生々流転・ミヅノハメノミコト図」 漆原夏樹+千賀基央  
紙本彩色・ツメイヨシノ

その地に永く祀られてきた水のカミとはどのようなものなのだろうか。絵画として顕わす行為に戸惑いながらも、水にまつわる地を巡り、その地に受け継がれてきた山河や営みが集積した「見えてしまった景色」こそが、カミの顔わすべ像なのではないかと感じた。本作品は同じく水のカミに着目を得た、当地の材から作られた額と共に展示される。異なる作品が接続されることで、ビジョンの集積としてのカミの姿が立ち現れるよう願っている。

③ 第3会場 民宿カプリコーン



「ある調査者の作業小屋」 荒木佑介 + 伊藤允彦 + BACCO  
軟石・木材・紙・粘土・写真

塞の神や、姥神、火伏信仰や山神信仰の痕跡を辿る中で、私たちはこの地における水の循環や流れの節目がつくる境界を目の当たりにし、そこにかつての人々が見出したカミの姿を垣間見た。調査はさまざまな示唆を生み出すが、制作の過程で溢れるもの、変容するものがある。調査と制作の境界を超え、私たちがあの時確かにみた、この地に住まう人々の水への祈りを記述するため、調査の手つきそのものをここに残す。

④ 第4会場 平成森鮮組屯所



「ここで大地の音を聞く」 永治晃子  
映像インスタレーション・写真

春先、貴僧坊では水の張られた田んぼに金比羅山の稜線が映り込む。自然が作り出した形と人の暮らしが呼応するその風景から、絶対的な大地に対して小石を投げて広がる波紋のように里を上げていった人々の静かな音を感じた。山の中の沈み込むような雨音。風に揺られる葉の上の朝露。この場所だからこそ感じる風、時の流れ、そして音がある。そんな場面を拾い集めながら、ふとそこに聞こえてくる「時の音」に耳を傾けてみてほしい。

会場内に点在する、映像・写真などを用いたインスタレーション作品  
(会期中夜間、不定期に上映する映像インスタレーション作品もあります。日程等はHPでご確認ください)

田んぼのインスタレーション「ここで大地の音を聞く」

布出力の作品「空と川をつなぐもの」

ストロボの映像インスタレーション「始まりの始まり」

写真作品「水の舞う森」

窓の立体「風の通り道を眺める」

映像作品(モニター)「その呼吸」

広大な芝生の家

大ボラ会のぼり

消火栓

坂の上の道祖神

バス停

大見川

金比羅山

道祖神

貴僧坊

段野山

山菜田

山菜田

黒曜石

江戸期の墓地

桜の公園

簡易水道の水道タンク

① 軍馬の馬頭観音

↓至筏場



## うぶすなの水文学 CLIFF Area Map EDGE PROJECT

⑤ 第5会場 井上倉庫

「A floating tree」 西野壮平  
写真・映像・木

火山の稜線に広がるブナの群生地や苔生したカワゴ平の山肌を歩き、火山噴火によって出た噴出物や土の歴史から川の始まりを想像し、山から一本の木を切り出し、旅の道具である舟を作ることから始まった。多くの地元の有志と共に丸木舟を一つ一つ制作し川を下るという半年以上にも及ぶ一連のプロセスは、山や良質で豊かな清流に礼賛する時間でもあり、また祈りにも近い神聖な感覚も得る時間でもあった。しかしそれと同時に容易に近づくことを憚れる川の怖さも感じた。川の始まりから大海の駿河湾まで、一本の木と共に移動したこの旅を通して、様々な支流からなる川の境目や海へと流入するまでの速度や水質、船から見上げた景色の変化を身体的に捉えた。

② 前夜祭「水の沙庭」(2023)  
ダンス 小暮香帆 / 笙・うた 大塚惇平  
龍笛・和琴 中村香奈子 / 箏・うた 三浦元則  
上演時間:約15分 会場:貴僧坊水神社

水神社の一年に一度の御祭前夜、そして「CLIFF EDGE PROJECT」のはじまりでもあるオープニングパフォーマンス前夜祭「水の沙庭」。身体表現で第一線を駆け抜けるダンサー小暮香帆と、国内外に活躍の場を広げる雅楽奏者の大塚惇平・中村香奈子・三浦元則の古典古代歌謡をベースに構成されたコラボレーション。古来より神祭りが行われる清浄な空間を沙庭(さにか)という。雅楽に潜在する音の波はダンスにどう波紋するのだろうか。また一つの身体という宇宙から雅楽の奏者三名はいにしへの霊媒者(さにか)のように、それぞれ何を感知するのだろうか。

※「水の沙庭」「water energy」は、井上倉庫のはなれで記録上映を行っています。

# CLIFF EDGE PROJECT

Archive Map

うぶすなの水文学

沼津市

清水町

函南町

伊豆の国市

13

伊豆市

12 11

10

8 9

6 5

7

4 3

2

1

## ①天城の山から

天城山に降った雨が地下水や河川となり、大見川から狩野川に下り、やがて沼津の海に流れ出る。

## ②カワゴ平

伊豆の火山の中ではとても若く、わずか3,200年前の噴火。

## ③菜畑の滝

筏場わさび田の上流部にある細い滝。その姿に多くのアーティストたちが関心を持った。

## ④筏場のわさび田

カワゴ平からの溶岩流の先端から大量の湧水があり、その湧水でわさびが栽培されている。

## ⑤蛇喰山崩落跡

カワゴ平の噴出土砂は大変水に弱く、狩野川台風の際には大崩壊した。

## ⑥椎の木平の大樹

樹齢千年と呼ばれている椎の木。樹齢千年という意味は実際に千年という意味ではなく、それほどの巨木であることを示している。また、この地にはかつて畑の跡があった。ダンサーの小暮香帆は、ここに訪れた際ダンスを踊った。

## ⑦萬城の滝

地藏堂川の途中に掛かる萬城の滝は、カワゴ平とは別の火山の溶岩流で出来た滝。溶岩の様子がよく観察できる。アーティストの永治晃子は、ここで撮影と録音を行った。

## ⑧貴僧坊水神社

天城山に降った雨が地下水となって、段の山の麓から湧出している。その水を祀っているのが貴僧坊水神社。水神社では、神事として日本画家の漆原夏樹と木工作家の千賀基央が作品を発表し、小暮香帆や雅楽奏者たちが公演を奉納した。

## ⑨段の山

数十万年前、天城火山が流出した溶岩が谷底を埋め、その後、周辺が削られて大見川と地藏堂川になり、本来の谷底であった部分が残って段の山となっている。アーティストの久保美貴は、この場所で採取された粘土を使用して陶芸に取り組んだ。

## ⑩大見川

伊東方面から多くの河川が合流して修善寺で狩野川に合流し、沼津まで流れていく。

## ⑪中伊豆市立中伊豆中学校

昨年度、雅楽奏者たちは音楽の授業で在校生に雅楽の演奏を行った。

## ⑫中伊豆市立中伊豆図書館

アーティスト・サーベイヤーの荒木佑介、伊藤允彦は文献調査を行い、調査を元に旧中伊豆町の様々な場所へ赴き、石仏や伝説についてフィールドワークを行った。

## ⑬大門橋付近

写真家の西野壮平は、この場所からカヌーで沼津の海へ下った。

この展覧会は、伊豆半島中部天城山麓の山間地域である貴僧坊地区と姫之湯地区を舞台に、ふたつの視点から「水」という物質にアプローチしたものです。

ひとつ目の視点は「水への信仰」です。水への信仰といえば、貴僧坊地区に鎮座する貴僧坊水神社には、水の神ミヅノメが祀られ、周辺地域には、川や道の重要な箇所を塞ぐ神などの道祖神の姿が見られます。これらの神々は、この土地を守る産土神(うぶすながみ)として祀られており、古くから人々の信仰を集めてきました。

ふたつ目の視点は「水の循環の科学」です。水の循環を主な対象とする学問に、「水文学(すいもんがく)」があります。伊豆半島では、海や地表から湧き上がった雲が、天城山で雨雲となり、強烈な雨を降らせ、その雨は地表を流れるもの、地中を流れるものなどさまざまな経路でやがて川へと注ぎ、川は、伊豆半島を北上する狩野川などのさまざまな河川へとつながり、太平洋へと注ぎます。そしてその水分は大気中の水蒸気となって雲を構成し、天城山へと上っていくというサイクルが繰り返されています。このような水の発生、移動、分布を含む多様な水のありようを科学的に分析するのが水文学なのです。

天城山は、全国でも屈指の年間降雨量を誇る山地です。昭和33年に伊豆半島を襲った狩野川台風で降り続けた大雨は、その中腹の火山、カワゴ平の噴火の堆積物でできたもろい地形を崩し、麓の筏場地区にある蛇喰山の崩壊を招くなどの災害をもたらしました。天城山の降雨は、多くの恵みをもたらす反面このような災いをもたらして

きました。このような水の力をうぶすなの力として信仰することは、この地で生きる人々にとって必要なことだったのでしょう。水のふるまいは、すなわちうぶすなのふるまいであるとも言えるのです。

この展覧会では、参加アーティスト13名が、水に関わる自らの体験や本展に先立って行われた現地調査をもとに、この土地と水をテーマにした造形作品やダンス、雅楽演奏の作品を制作しました。アーティストたちが「うぶすなの水文学」というタイトルをどう解釈し、芸術作品として作り上げていくかが見どころとなっています。

それでは、個々のアーティストと作品を見ていきましょう。

第1会場の貴僧坊公民館では、アーティストの久保美貴による映像インスタレーション、陶芸および書籍による作品が展示されています。彼女は自らの流産と早産の体験や、不妊治療経験者へのインタビューを通じて感じた、生命の神秘、命の巡りについて作品化します。インタビュー映像では、生まれる途中で流れていった小さな命と、水の循環を重ね合わせます。また、日本神話のイザナミの出産のエピソードにこの土地の地形の成り立ちをなぞらえ、カワゴ平および天城火山の噴出物で制作した陶芸作品は、イザナミ、カグツチ、ミヅノメを表現しています。

第2会場の貴僧坊水神社には、日本画家の漆原夏樹と木工家の千賀基央による絵画作品が展示されています。屏風状の絵画の中央に描かれているのは、この神社の祭神ミヅノメです。これは漆原によ

る日本画です。彼は目に見えない存在であるミヅノメの姿を顕すことの難しさを感じながら、持ち前の、風景画と人物の融合した図像のスタイルを用いて、自然の風景と神の姿が融合した図像を描きます。また、千賀は、この漆原の作品をより引き立たせるため、裏山で切り倒されたソメイヨシノを用いて作品の台座を制作しました。

第3会場の民宿カブリコーンには、アーティストでありサーベイヤーのふたり、荒木佑介と伊藤允彦、デザイナーのBACCO夫妻によるインスタレーションが展示されています。ここは、八岳地区に伝わる塞ノ神、姥神信仰、火伏せ信仰、山神信仰などの痕跡や、水の循環、水の流れる境界を調査するうちに、カミの姿を幻視するようになったある調査者が、「八岳権現道研究所」と名付けた部屋です。そこには、地域のマップや研究書、権現様と呼ばれる石造りの祠のレプリカ、そしてカミの存在が映っていると思われる写真群が展示され、一種の神聖な空間となっています。鑑賞者は、この写真群から一枚の写真を手に取り、カミの姿を探索することができます。一体その場所には、何が存在しているのでしょうか?

第4会場の平成森鮮組屯所には、アーティスト永治晃子による映像や写真を配置したインスタレーションが展示されています。この地域の水にまつわる現象を丹念に取材した永治は、この地域から聞こえる音に注目しました。里に暮らす人々の音を採集しながら、その音を可視化し、繊細な映像作品や写真作品にまとめています。また、夜間しか見られない映像作品は、水を張った田んぼの中に設置された不定形のスクリーンに投影され、田んぼの水とともに静かに揺れ動きます。

第5会場の井上倉庫には、写真家西野壮平によるインスタレーションが展示されています。彼はこれまで、国内外のさまざまな地を旅し、自身の記憶や経験に基づき身体的に世界を見てきました。そして、記憶の断片である写真をコラージュという手法によって風景を再構築するといった制作を行ってきました。しかし、今回は今までの制作の手法である歩くという行為に加え、伊豆山中で伐採された一本の巨木から丸木舟を作り上げ、それを使って狩野川を下り駿河湾へと辿り着き、川から兩岸を見た視点も取り込みながら制作に挑みました。今回のインスタレーションは、その記録映像と川下りに使った丸木舟、丸木舟を削り出した時に出た木片に印刷した写真などによって構成されています。

同じく第5会場の井上倉庫のはなれには、展覧会開催前夜に行われた貴僧坊水神社での前夜祭と、井上倉庫でのダンスと雅楽演奏のコラボレーション公演の記録映像が上映されています。今回の公演でダンスを披露するのはダンサーで振付家の小暮香帆です。彼女はこれまで川や湖などで水の中で踊った経験があり、それが今回のオフアワーのきっかけとなりました。また彼女のダンスと共演する雅楽奏者の大塚惇平、中村香奈子、三浦元則は、伝統楽器を用いながら、伝統的な楽曲だけではなく、その場の空気を読み取って行う即興演奏も得意とする演奏家たちです。「水の沙塵」、「water energy」ともにどんなパフォーマンスが披露されたのでしょうか。